2025 年 8 月 5 日
※片岡則夫(kataoka@toshokanshinko.or.jp)
★山﨑勇気(yamazakiyuki@seikyo.ed.jp)
♪南百合絵(yminami@seikyo.ed.jp)

「探究学習・調べる学習ひろば」参加者のコメントから_6

7 月 19 日（土）20：30～22:00 に実施された「探究学習・調べる学習ひろば」の第 6 回は、41 名がライブ配信に参加、事後アンケートに 10 名が回答して下さりました。以下、抜粋引用（青文字）するとともに、簡単な回答・コメントを記します（♪…南 / ★…山﨑）。また、片岡が講師をつとめた福井県の研修会での質疑応答も付します。

資料置き場 @GoogleDrive

・配信の音声アーカイブ & 配布資料はこちら→(**アーカイブ配信/資料置き場**)
・清教学園の卒論テキスト、生徒作品サンプルはこちら→(**探究大全基本資料**)

探究学習は大人がやっても面白い

初参加でした。私は、調べコンの担当で、個人的に拝聴させていただきました。内容はもちろん、長年の実績に基づく分析も素晴らしく、資料もとても参考になります！

最近の懸念事項として、上司に『大人の部の参加者数を増やしてほしい』と言われていることです。第２７回で文部科学大臣賞を受賞した高橋さんの講演イベントを個人的に観に行き、純粋に面白かったのですが、あのレベルを求めてはいけないとは思いますが、せめて参加者数を増やしたいと思っています（他業務もあるため調べコンに時間を割けないのが実状ですが…）。次回も楽しみにしています。素敵な企画をありがとうございます。(市立図書館副主査)

♪ご視聴、ありがとうございました。たのしんでいただけたようで、なによりです。こういうコミュニティがあるということがいいですよね。

さて、「大人の部の参加者を増やしてほしい」という上司の意図はどのようなところにあるのでしょう。参加者が少ないからねらい目？大人にも調べる学習を楽しんでほしい？？？そして、ご自身としては、どう思っているのでしょう。大人にももっと経験してほしい？せっかくやるならよい作品にしてほしい？？調べるのが好きな人は、きっと図書館にきているはずです。ただ、調べたことをまとめて人に伝えようという人は、ハードルが上がりそうな気はします。大人の参加者のすそ野を広げるという意味では、いきなり作品を、というのは難しいと思うので、小さなステップを考えてみてもいいかもしれま

せん。どれくらいの規模でアピールして取り組むかにもよると思いますが、「おすすめの本棚を作る」とか、「POP を書いてもらう」とか、実現可能かはわからないのですが、なにか最終的に調べる学習につながるような、おとな・こどもを問わない図書館の企画を考えてみてもよいのかもしれません。

★公共には調べコンの担当者というのがあるのですね。探究学習はなにも学校だけの専売特許ではないので、ぜひ公共図書館でも広げていってもらえると嬉しいです。何より資料数が多いので、むしろ学校よりできることが多いかも…。大人もそうですが、参加者増のためにはやはり体験してもらうことが一番なのかなと思います。過去の参加者の作品を展示したり、参加者の声を公開させてもらったり、色々考えられそうですね。生涯学習という意味でも、楽しめる人は多いと思います。先日も、学校の先生方向けに体験セミナーを開きましたが、皆さんとても真剣に、楽しそうに作品作りをしておられました。

興味を学ぶ楽しさ、興味を考える難しさ

茨木で探究学習体験に参加させてもらいました。あの時に、自分が興味あることを調べる楽しさ、他人の興味あることを聞く面白さを感じましたが、同時に「これは自分の興味関心を知っていないと難しいなぁ」とも感じたので、今日のお話にすごく共感しました。(ある程度年輪を重ねた大人の方が、テーマに広がりがあって面白いとあの時感じました。)

私自身は、自分が小中学生の頃に「はい、好きなテーマを調べましょう」と言われたらテーマ設定に苦労して途方に暮れたと思います。でも、まずは「自分を知る」ということがそもそも根幹としてものすごく大切な事ですよね。あの時にも教えていただいた「ミニミニ探究学習」、まずはそういう取り組みから子どもたちが「自分はこういう事が好きなんだ」「こういう事、興味あるな」と発見できるようなそういうきっかけを作りたいと思いました。

とりあえず、まず秋にポプラディアを使ったミニミニ探究学習をやってみようと思います。色々と種まきしてみたいなという気持ちをもらえました。たくさん参考になるお話をありがとうございました。今後も勉強させてもらいたいです。(小学校学校司書)

♪画用紙 1 枚の調べ学習くらいなら、「えいや」でやってしまえますが、論文のフォーマットになると一気に難易度が上がりますね。やっていくうちにおもしろくなることもありますし、「好きなことがないとだめだ」となるのも心配だとは思っています。でも、なにか「自分にはこれがある」と思えるものと出合えるといいなと思っています。年輪を重ねた大人の方が（これ、いい表現ですね）テーマは確かに面白そうです。先日大人のみなさんとやった「ミニ調べ学習」は、50 人ほどいらっしゃったのですが、同じテーマの方は一人もいらっしゃいませんでしたし、どなたのテーマもおもしろそうでした。

★「なんでも学んでいいよ」と言われて困る生徒はそれなりにいて(以前のアーカイブなどでも同じ話をしていますが)、学校教育でそれが問われる機会って意外と少ないので、当然の反応なんですね。それでも、体系化され整理された図書館があれば、そこにいい本があれば、自ずと出合いが生まれます。「こういうことを調べるぞ」という目的を持った情報探索もまぁ当然あるのですが、それ以前に、「自分はどんなことに興味があるんだろう」と、目的のない情報探索で図書館を使ってくれたらなとも思うのですね。後者は中々、図書館の意義のアピール材料としてはピンと来ない方が多いのですが、探

究学習はむしろ目的のない情報探索にこそ、図書館の有用性が発揮されるように思います。ぜひ貴校でも、そうした利用が行われる取り組みに挑戦してみてください。

探究学習や図書館活用は「コスパ・タイパ」と合わない / 地方の学校の図書館活用

初めて参加しましたが、興味深く拝聴しました。ありがとうございました。本校、以前の勤務校でも、高校生は多くの教科課題や塾、予備校の課題など多くのタスクを抱えていることもあり、タイパ、コスパをより重視する傾向があるかなとは思いました。あと、本校は地方にありますが、学校図書館の蔵書が非常に少なく、司書が常駐しているわけではないので、レファレンスが不十分になってしまうことから、どうしても文献を使った研究になりにくいというもどかしさがあります。(高等学校教諭・地理歴史科（日本史）)

♪ありがとうございます。いつもあんな感じでゆるゆるやっております。図書館が機能していないと、個に応じた研究は難しいですよね。本がいきわたると、各自学びを進められますが、そこにいたるまではどうしても手が必要ですよね。生徒も先生も忙しいので、公共図書館に行こうというのも、自分の時間で行ける子はだいぶ限られますよね。自動車図書館（BM）が学校に回ってきてくれるよう要請するとか、目星をつけた本を団体貸し出しで先生が借りに行くか…。いっしょにやってくれる仲間を探したいですね。

★どの学校・地域も同じ悩みを持たれています。忙しい、資料が少ない。後者に関しては公共図書館も頼ったり、学校図書館を充実させていけるよう説得するしかないですね。本校も、図書館の仕事の 1/4 くらいは、こんなに「図書館使えるんです」のアピールです。前者についてはカリキュラムマネジメントですね。うちの中学生は週 1 の授業、1 年間で、平均 20000 字くらいの論文を書きます。図書館の充実があれば、授業設計で意外とコスパ・タイパよくやれるものなんですけどね。そのあたり図書館に詳しい人がそもそも校内にいなかったりして、実現できない学校は多いです。

	生徒に求める理想像	実際の生徒の様子対する教員の意識
取組みの態度	自ら主体的に学んでほしい	社会課題に興味がなく主体的に学ばない →ある程度仕方ない
時間的制約	授業外でも積極的に取り組んでほしい	部活と主要教科の学習で忙しい →課題は授業時間で済むよう授業設計
資料活用	安易なWeb利用に頼らず図書も活用してほしい	図書館機能の活用は時間がかかる →適切なWeb利用で資料活用を賄いたい

授業者が司書に求めること

初めて参加させていただきました。中学生・高校生それぞれの探究への意欲や反応の違い、非常によくわかります。他校でも同様の悩みがあるのだな…と、少し安心した部分もあります。「問いを見つける」というのは、大人でも難しいことですよね。しかし、「探究とは何か」を改めて考えられる良い時間でした。ありがとうございました。

本校では図書館の利用が活発とは言えず、司書教諭もとりあえずいるから法律上問題なしだよね、という状況です。蔵書も予算も他校と比べかなり多い…と充実しているように見えますが、古い図書も多く、選書は焦って慎重にできず、司書一人ではなかなか整備が進まないのが現実です。探究学習の際の授業サポートや生徒への説明も、すべて司書が行っています。（事務員は授業を担当できないので、あくまで支援のためのゲストスピーカーとしての立場を強調しています）

教員が疲弊している現在、同じような状況の学校は多いのではないかと思っています。学校に対しこの状況をアピールしていく必要があるというのは大前提として、探究の際に生徒・教職員を支えるために、司書に対しどのようなサポート・スタンスを求めますか？もちろん、学校によって異なるでしょうが、清教学園の先生方のご意見があれば、聞いてみたいです。アバウトな質問で申し訳ございません。（中高一貫　学校図書館司書（事務員））

♪ご参加いただき、ありがとうございました。生徒への説明もおこなっておられるのですね。授業の間で前で話をする人が変わるのは、個人的には生徒の興味もひけていいのではないかと思います。でも、丸投げされるのは違うので、いまされているように、あくまで授業の主体は先生、というスタンスがいいのではないかと思います。また、私個人として、司書にこれをしてもらえるといいなということは、まず1番は、本をそろえてくれること、2番目は元気がない生徒をかまってくれること、3番目に「こんなことあった」「あの生徒がこんなこと言ってた」など、私が気づいていない場での生徒の情報を教えてくれることでしょうか。うーん、2番目と3番目は逆かもしれません。複数の目で、生徒のこと、授業のことを考えられたらいいなと思っています。

★初参加ありがとうございました。探究学習についてはどこも同じ悩みはあると思います。過去アーカイブにも色んな悩みをお寄せいただいたので、ぜひご覧ください。そうしたな探究学習の悩みに対して、学校図書館が上手く機能しそれなりに解決に至っているのが本校の特徴かなと思います。校内でのアピールについては毎年書いてる事業報告(→リンク)など参考になるかもしれません

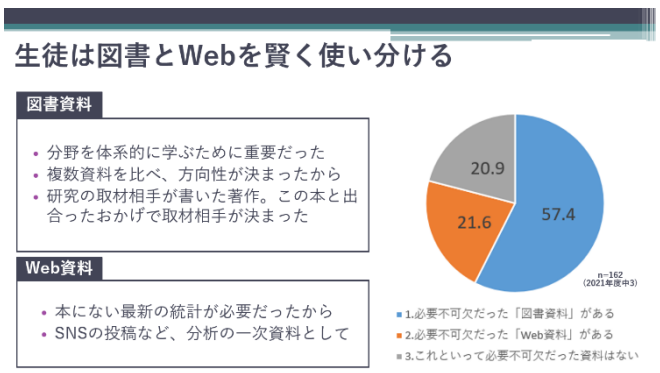
転じて、「司書に対しどのようなサポート・スタンスを求めるか」ですが、受入など基幹業務はもちろんそうなのですが、教員からするとそもそも「この人は何ができるんだろう・してくれるんだろう」ということすらわからない状況なんですね。だから、「私はこんなことができます」といった説明からだろうなと思います(もちろん、距離感を計りつつ)。僕や南先生などは、そもそも司書出身なので全国的に見ても特殊事例です。授業を持ちつつも自分が図書館で働いていた人間なので、図書館で何ができるか、司書に何ができるかは自分でわかります。でも普通の教員は、図書館で授業なんてよくわからない世界ですし、レファレンスがどうとか、探究テーマに応じた選書がどうとか、そんなことすら知らず、頼んでいいかどうかもわかりません。何を売ってるか、どんなサービスを提供してくれるか、よくわからないお店が近所にできても、たぶん怪しくて(好奇心旺盛でもないぎり)行かないですよね。教員自身が学校図書館や公共図書館で(教科学習の自習以外で)学んだ経験など皆無に近く、もっといえば探究学習すら自分の学生時代にやった経験は無い人も多いので、そもそも「何ができるのか」を共有するところからなのかなと思います。我々は司書的な仕事、授業支援も当然するのですが、授業を担当される先生とは授業設計の段階から話すこともよくあります。どんな授業がしたくて、その目的は何で、それに対して図書館が何をできるか、すべきか、という内容を詰めながら授業づくり自体に関わることもちょこちょこあります。そうした相談ができる体制がまずほしいですね。そこから先、授業支援でのテクニカルな要望もそれなりにありますが、長くなりそうなのでいったんこの辺で…。

情報探索で図書・図書館を使うことのよさ

今回は、前半が長かったですね。それでも、中学生と高校生の調べ学習、探求学習の違いや子供たちの取り組み方の違いを知れました。なかなか図書館現場ですと、そういった学校現場の様子が見えない部分も多いので、参考になります。やはり、ネットの勢いはすごいですね。本から得られることも多いのですが、情報量が多い現代は、ネットで調べることが常識で、それを精査する必要もあるのですが、そのまま活用するケースも多い気がします。AI も発達していますが、最終的には人が精査しなければと思っていますし、それが図書館員の仕事になるのかなとも思います。限られた時間で効率的に調べ学習や探求学習をしなければならないとなると、今の子供たちは本当に大変ですし、先生方も大変ですよね。図書館での子ども向けイベントのなかで、そういったネット情報の活用方法も活かしたイベントをするのも一つのやり方ではないかと感じました。後半は少し中途半端な形ではありましたが、また次回も楽しみに視聴させていただきます。ありがとうございました。(公共図書館館長　司書)

♪ご視聴ありがとうございました。手探り、のんびりの「ひろば」ですね。ご意見いただけるとありがたいです。その企画は子どもにも大人にも人気が出そうですね。興味のある方は多そうです。一方で、子どもたちは情報探索のプロになる必要はなく、そこをフォローするために司書がいると私も思っています。もちろん、あやしい情報を信用しないといったリテラシーは個人に必要ですが。学校でもよく話題になるのですが、「忙しい」を理由に本当に大事なものを落としていきたくないなと思っていて、本の良さというものは、やはりその周辺知識にあるのではないか、一見そのとき無駄に思えるようなものにこそ「よさ」があるのではないかと思ったりします。学校現場でもなかなか実現できていませんが、この探究の授業がそうであり、そんな話を一緒にするために、私は生徒がいつでも話しかけられる場所であるカウンターに座っていたいと思っていたりします。

★あの話題は長くなるだろうなぁと思っていましたが、案の定でした。またどこかで特別回を組めたらと思います。生徒の情報探索行動は、目的に応じて 2 種類に分けられます。「A.自分に必要な情報を認識していて、それを求めている場合」「B.自分に必要な情報が何かわからず、とりあえず外部から情報を取り入れようとしている場合」です。A なら Web の方が早いです。キーワード検索すれば適当なものがヒットします。情報の信頼性についても、適切なドメイン検索など教えれば問題ありません。AI ならプロンプト次第ですね。一方、探究学習で図書館を使うべき理由は B です。何がやりたいのか、どんなことを調べたいのか。そうした漠然とした状況に対して、系統立てられた書架や、体系的に書かれた図書が有効です。Web や AI は利用者自身がある程度の知識を有していなければ使えない、鍵のかかった百科事典。図書館はそもそもテーマすらおぼろげな初学者が学ぶに恰好の場。学校の授業における Web と図書の役割は、そのように分けています。生徒自身への振り返り調査からも、同様の結果が出ていました(右図)。本当はコスパだとかタイパだとか、学習に全く関係の



ない余計な考慮は、探究学習の邪魔なので脇におくべきなんです。それは教員や、学校組織全体の課題ですね…。

レファレンスでの図鑑の使い方

毎回聞き応えのあるお話をありがとうございます。気軽に参加できる「ひろば」ありがたいです。今回は動物に関するお話が多かったので、次回は植物のお話をお聞きしたいです。植物調べをする際、どの図鑑に最初にあたるか。いつも頭を悩ませます。尋ねられた花の名前が別名だったり、帰化植物だったため帰化植物図鑑にしか載っていなかったり。皆様はどうされていますか。(小中高学校司書)

♪参加ありがとうございました。また次回もよろしくお願いします。植物も動物も、図鑑で探すの難しいですよね。私は、古いですが牧野富太郎『原色牧野植物大図鑑』や荒俣宏『世界大博物図鑑』なんかを頼りにしてます。この辺を探してヒットしなかったら、あたりをつけるのにインターネットも使ったりします。あとは片岡先生が寄贈でおいていってくださった『朝日百科動物たちの地球』、『週刊朝日百科植物の世界』も詳しくて役に立ってくれてます。このあたりは生徒は自分では探せないので、こちらが出して渡します。

★いつもありがとうございます。次回は植物、そうします。3 週間あくと前に何喋ったか忘れそうで…笑 リクエストありがとうございます。図鑑についてはどうだろう。植物図鑑もいくつか所蔵してるので、なんか適当にレファレンスしているとそれなりに必要な情報にいきついているような気がします。僕がその手のレファレンスを受けたら、先に Web で検索して、別の名称をヒットさせてから図鑑で探したりするかもですね…。南先生どうですか？

自己の在り方生き方に関わる探究学習、それを支援する学校図書館

今回もありがとうございました！第 6 回目にして、そもそも探究学習とは？という定義を考える会を視聴できて大変参考になりました。ひろばのはじめの頃より高校生の探究における課題について話題になっていることも含めて、校内の教員に共有したいお話でした。このテーマだけで、延長戦あっても良いように思います！ちょうど夏休み中なので、宿題というか、自校の 1 学期の取組を見つめながら、今回共有された資料と共にじっくり考えたい内容でした。

勤務校では、探究と冠のついた学科がスタートしたことから、探究的な学びを教科の時間にも発展させる流れがあり、校内公開授業も活発に行われています。一方で、探究学習の「問いを立てる」＞「調べる」＞「発表する」のサイクルが細分化(「課題発見力」「表現力」「主体性」「協働力」などの資質とむすびつく)されて、そのどれを意識させようとしているのかという視点で研究授業が組み立てられていると感じることに、自分でも整理ができていない気持ちを抱いていたので、ひろばでの話はとても興味深かったです。山﨑さんの報告に出てきた授業担当者の方の探究学習の捉え方は、この教科における探究によっているものなのかなという印象を持ちました。教科では、教材を通して身につけさせたい（考えさせたい）テーマがあって然りだと思いますし、そういうものからこぼれ出るところに個の問いが生まれていくのが探究的な学び（本来の学習という意味でも）の面白みではないかな、という考えでもいます。そのへんが、教材なら出たとこ勝負でもある程度対応できているが、高校における総合的

な探究の時間で目指すものは、枠がなさすぎて、先生方は困惑されているのかな、と。調べ学習、探究的な手法を取り入れた教科の学び、総合的な探究がそれぞれどう違うのか（違っていいのか）、もう少し教員間でも交通整理されていくと良いのかなと感じました。出たとこ勝負なことに教員が慣れていく時間も必要なのかな、と。本校でも探究推進部の先生とは、よくこの話題になります。（本音では、「グループ」が「個別」になったら、めいめいの活動をする生徒一人一人を見るには教員側の余裕はないから導入できない、という声も聞こえてきます。グループで取り組むことに疑問を投げかけますが、あまり芳しい反応はもらえないです）余裕のなさが、パッケージ化にも結びつきやすいのでは、という危機感も持っています。本校では、低学力層のクラスを担当する教員ほど、その傾向を取るように感じています。そういうものは、アリバイ化された学びが散見されていて、生徒もその時間にはコスパ重視の（いわれたことをやる）態度をみせ、自己はほとんど垣間見られないことが残念です。

翻って、そもそも高校生が自己をみつめるための「読み」にどれほどこちらが支援をできているか、かなり疑問だとも思います。進路実現が大きく掲げられている中で、すべてのことがそこに集約される高校生の時期に、見過ごされているものがたくさんあるように思います。もっと読書くらい好きなだけできる環境があってほしいです。図書館、もっと使われてほしいです。

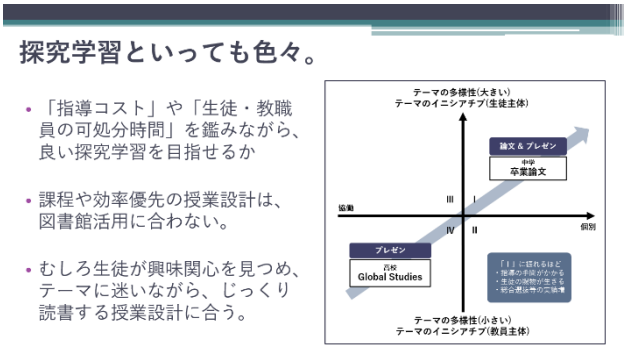
来月、中学校の先生方と「読むこと」について話す機会があるのですが、対話を通して読むことを大切にされている清教学園での中学生の取組を経て、どう高校生の段階につながっていけばいいとお考えになっているのか、中高連携の部分の実践がどうなっているのか知りたく思います。だらだらと長文失礼しました。(公立高校学校司書)

♪ありがとうございます。先生も生徒も余裕がなく、やることばかりが増えて、決められた時間の中でどうにかこうにかこなしていく…。そりゃ大変ですし、何がしたいのか、何をしてほしいのか、わけもわからなくなってきそうです。細分化して、どこで躓いたか可視化するとわかりやすいというもの理屈としてよくわかります。ただ、探究学習って、そんな思ったように進まないですよね。〆切がないと確かに決まるものも決まりませんが、〆切があったとて、決まらないものは決まらないのです。なにが出るかわからないけど、なにも出ないかもしれないけど、「待ってるよ」というアピールをしつつ「待つ」ということも仕事ではないかと思います。そして、「待つ」ということが、先生は苦手なのかも…。でもこれも、直接入試と関係がない立場だから言えるのかもしれません。

「なんでやねん」を経験した生徒たちには、本と図書館への信頼感が育っていたらいいなと思っています。それがすぐにその先の読書に結びつくかはわかりませんが、なにか必要になったときに、「本を読んでみよう」と思ってもらえたらいいなと思いますし、「図書館へ行ってみよう」「司書に聞いてみよう」と思ってもらえたらいいなと思います。

★案の定、長期戦の話題になってしまいました。けっこう議論の過熱する話題でもあるので、外で喋るときは(中でもですが)気を付けてます。つい先日も校内の他の先生とこの話題になったのですが、中々分かり合えず…。ほんまに難しい話題です。ただ、「総合学習」の場合は指導要領の第１目標が我々の考える「探究」に近く、それはまさに「自己の在り方生き方を考えながら」なんですね。ですので、自己の在り方生き方を考えられる授業を作ることを目指し、一方でそれが阻害されるような要素はできるだけ授業から排していくのがベターだと思っています。グループワークも、教員がテーマを決め

てしまうのも、「課題解決」のように問いの形を決められてしまうのも、僕個人の考え方としては、自己の在り方生き方を考える機会を奪っているように思います。というか、授業で担当した生徒や、レファレンスで対応した生徒の語りからはそうした状況がよく見えます(詳細は文科省レポートをご覧ください)。もう一つ言えば、何を学ぶか、どのように学ぶか、なぜ学ぶか、予め授業者によって決められているような探究学習は、図書館の出る幕は全くありません。Web 検索の方が早いからです。貧困問題、環境問題…別になんでもいいのですが、図書館の資料を端から探索して、うんうん唸りながら精読する必要が全くないんですね。一般論としての「解決策」はネットで調べれば出てくるからです。生徒自身もあまり興味がありません。自分でテーマを選んでいないので、べつに本気でその問題をどうにかしたいとも思っていません。ですので、山﨑自身が、テーマがあらかじめ決められていたり、グループ学習にこだわる授業観に何らか抵抗感を持ってしまうのは、おそらく自身の仕事の存在意義をかけているからだろうな、とたまに思います。テーマを自分自身で決める探究学習だからこそ、図書館が使われ、自己の在り方生き方にコミットすることができるからです。



紹介した文科省の委託研究事業では、教員の教育観も浮き彫りになったことがひとつの成果でした。仰るように「教科における探究に依っている」側面がありつつも、それはもはや、特定教科的の特性を越えて「教員の性」なのだろうなと理解しています。生徒は社会にとって役立つ存在にならないといけなくて、そのためにはグループ内で互いに協力し合う力を身につけなければならず、テーマも社会課題、なんですね。これは社会科に限らず他教科教員も異口同音でした。そして特定教科に拠らない全国の多くの「総合的な探究の時間」でも、生徒個人の興味や関心を大切にする授業は稀です。教員のそうした教育観、生徒教員の忙しさ。その二つの要素が合わさった時に、まさに仰るようなパッケージ化された探究学習が台頭するんですよね。うちにもほんとうにたくさんの営業電話がかかってきますが、どこも似たり寄ったりです。社会課題、協働学習、業務時間短縮、学習時間短縮、評価システム、ポートフォリオ…。段々腹がたってきたのでこの辺りにしておきます。すみません。

本当に鋭い洞察をされていて、なおかつ司書の立場でおられながら校内で他の先生相手に立ち回っておられる様子が、文面からよく伝わりました。こちらも触発されてたくさん書いてしまいました。うちの高校の状況は配信でお伝えした通りです。実際に授業を担当し、なおかつ学習支援も担う立場からすれば、中高の連携のできなさ、本校のような図書館がありながらも活用され辛い状況に、歯がゆいものがあります。そうした状況の中でも少しずつ仲間を増やして、エビデンスを示しながら前に進めていくしかないのだろうなと、何年もちまちまやってます。

教員は生徒を正しく導きたいが、探究学習は導かれてやるものではない / 「個々人が興味を学ぶ探究学習」にシフトチェンジした学校の背景

いつも丁寧な回答をしていただき、ありがとうございます。テーマ動機が「生徒の興味・関心」だと図書が活用される、また片岡先生の資料の中の「個別の学習局面に応じた援助が、学校図書館を育て

る」というお話が響きました。本校もネットでさっと調べて終わる調べ学習が多いので、「生徒の興味・関心でテーマを決める探究であったら、図書が活用されるのではないか？」と思います。

しかし「授業担当者の教育観による」ため、やはり実現は厳しそうです。何人かの先生に清教学園の事例、図書館総合展の資料を紹介したのですが、反応はありませんでした･･･。清教学園のように「学ぶ内容を自分で決める」探究をしている、または「(学ぶ内容を)与えていたが生徒で決めるように変えた」学校があれば、その様になった背景を知りたいです。(公立高校学校司書)

♪私個人の感想なのですが、先生は、「子どもを正しく導きたい」と考えておられる方が多いように思います。なので、自分が教えられないことを指導するのは難しい、とすごくまじめに考えておられるように思います。一方私は、わからないことはわからない、勉強した生徒に教えてもらおう、というちゃらんぽらんな姿勢ですので、やりやすい方法が違うのかもしれないとも思います。

★そうですね、個人で、興味があることを、という探究学習に変えていった学校の事例はいくつか知っています。お話を伺うと、だいたいの学校が、「生徒のやる気のなさ」と「進路との接続」を挙げられます。前者は、協働的な学習、教員によるテーマ設定ではグループ内の紛争解決が仕事のほとんどになってしまい探究学習にならなかった、と考える学校ですね。よく聞く話ですので、こうした状況は全国的なものなのだと思います。一方で後者は進学校に多く、総合選抜の割合がどんどん増えており、口頭試問で大学から問われるのも「あなた個人は何を探究したの？なんでそれを探究したの？」なので、いっそ個人で興味があることをさせた方がいい、進路選択にも繋がる、という理由です。いずれも理に適っていると思います。下心として進学実績は当然あるでしょうが、そもそも「学ぶ」という行為は、学級内のグループでなく、生徒個々人に帰結すべきという学習観を持てることそれ自体が、学校の先生としてはラディカルな発想です。そうしたカリキュラムを、進路と直結する高校現場で、学校をあげてやれる組織は羨ましいなと思います。

グループ学習を経験した生徒のリアルな語り ／ 論文の授業を受けていない有志生徒の探究学習

バタバタしており、当日は途切れ途切れにしか拝見できなかったうえ、音声アーカイブもまだ途中までしか聞けていません。次回までにしっかり拝聴させていただきます。申し訳ありません。冒頭のジングル、とても素敵でした！そして、タイトルコールのお声は、もしかして山﨑先生のお嬢様でしょうか？「めっちゃカワイイ！」と、一気にテンションが上がりました。

高校の GS についてのお話があった際に、中学生のわが子の体験を思い出しました。以前、調べ学習の課題でプリプリ怒っていたことがありました。「それほど興味があるわけでもないテーマを、グループで調べて発表しないといけない。しかも、取り組み方に温度差があって、自分が一生懸命やったのに、成果を他の子に取られた気がしてすごく嫌だった。」と言っていました。「ひとりでする方が気が楽！」とも話していたのが印象に残っています。グループ活動の難しさも感じました。

高校の GS では、クラス数が多かったり、大学受験との両立などもあって、個人での探究学習は難しいところあるのかもしれません。しかし、アカデミカで学びを深めている生徒さんがいらっしゃるとのこと。３年コースの生徒さんも参加されていることを知りました。３年コースの生徒さんはアカデミカでどのような感じで学ばれているのかな？とふと思いました。(小学校教諭)

♪グループ学習にはグループ学習の悩み・やりにくさがありますよね。個人的には、個人で取り組んだ方が、やったこともやらなかったこともすべて自分に返ってくるとわかりやすいのはいいところだと思っています。人間関係は、クラスや部活などほかのところでいくらでも学べると思いますので、探究は自分と向き合う時間にしてほしいと思っています。

アカデミカは、月に 1 回定例会をもって、みんなでなにかに取り組み（たとえば作文トレーニングをしたりだとか）、あとは個別に、おのおの取り組んでいます。アウトプットの形もそれぞれで、定例会には来ているけれど、論文作成を目指さないという生徒もいますが、異年齢のゆるやかな仲間、という関係性はできているのではないかと思いますし、お互いの存在が刺激にもなっていると思います。

★はい、山崎の娘に出演してもらいました。ノリノリで収録させてくれました 笑

お子様のような語りは、探究学習を受けた生徒の声として、残念ですがかなり「あるある」なんですね。配信で紹介した文科省委託研究事業レポートでも、似たような生徒の語りを得られました。その手の愚痴を本校の図書館でこぼしている生徒も多いので、授業設計の課題、教員の教育観の課題だろうなと思います。他校についても同様です。ひどい話では、推薦型入試等での「成果の横取り」みたいな事例もよく聞きます。自分が頑張ったのに、フリーライダーの生徒がさも自分の成果の事のように大学入試の面接で喋っている、と。こうした状況をどうにかしていくのは、我々のような立場の人間の仕事ですね…。

アカデミカの事も知って頂きありがとうございます。授業ではない有志活動で、しかも中学で論文の授業を受けていない 3 年コース生が成果物を仕上げるのは中々至難の業です。3 年コースのアカデミカ参加生徒は毎年 1~2 名いるのですが、論文を仕上げたのは過去ひとりだけでした。女子サッカーの研究で、かなり緻密に統計分析や質的社会調査を駆使しつつ、いい論文を仕上げていました。一方で論文を書いてない生徒であっても、やはり自分が興味あることを学ぶ、という点では一貫しています。月にいちど図書館を訪ね、スタッフが勧めた本をひたすら読み、読書ノートをつけていた生徒は、そのまま東大に行ってしまいました。二次試験の英語小論では、こちらが勧めた現代思想系の本のテーマが出たそうです。現在は外交官を目指してバリバリやってます。自然言語処理(いまでいう ChatGPT ですね)を研究していた生徒は、英語⇔機械語(プログラミング言語)⇔日本語へと変換するしくみを構想してレポートを仕上げ、慶應義塾大に進学しました。授業ではないので「論文書くんや〜」というわけにはいかないのですが、何らか興味があることを読書で学び、それが進路開拓のきっかけになってるとは言えそうです。

探究学習が学校組織を和気藹々とさせる

今回もありがとうございました。私の勤務先の探究学習は、学年やコースでテーマが決められているので、清教学園さんの高校でされているやり方に近いのかな、と思いました。ただ、事前にテーマを教えてもらえるけれど、探究学習で図書館を利用することはほとんどありません。教員との連携が大切なのはわかりますが、なかなか協力を得るのが難しい状態です。「ひろば」での先生方の和気藹々としたお話を伺うたびに、うらやましく思っています。(私立高校学校司書)

♪そうですよね。私も人手不足でおととしから学年に所属することになり、先生方のお仕事の一端を間近で見る機会に恵まれ、授業に生徒・保護者対応、会議や学年企画、分掌、部活動など、先生方のマルチタスクぶりに驚きました。忙しくされているので、話しかけるのも気を遣いますよね。まずはどなたかおひとり、個人的な話もできる先生が見つかれば、先生方の内実も見えてきますかね…。司書教諭の先生でしょうか。ひとりで継続し続けるのは難しいので、結局、組織づくり、仲間づくりなのかなと思います。

★じっさい組織内ではいろいろあるのですが(笑) しかし、そのように「うらやましい」と仰る他校の先生はたくさんおり、そう思われる現場で働いていることのありがたみを実感します。能力育成や学習成果といった「一般的な学校の教育目標」から抜け出すことができれば、どうしたって組織は和気藹々とします。司書も教諭も。生徒の学びの様子が面白いからです。あの子はこんなテーマでやっている、あの子はフィールドワークでこんな経験をした、あの子にはこんなレファレンスが当たった…という話題は、教育における実存をひじょうに体現していると思います。願わくば色んな学校でそうした組織づくりが行われてほしいですが、そうならないのは本当に根の深い問題です。勅使川原真衣 編(2024)『「これくらいできないと困るのは君だよ」?』東洋館出版 が面白かったので、よかったらぜひ。

※※※

※ある程度（何割か）ハードルが高い子どもがいるのは間違いないです（小中高、学力レベルを問わずです）。この子らのハードルを低くするにはいくつも方法があります。

・最も簡単で重要なのは「問い」です。「何に興味があって、何が大事なのでしょう」と繰り返して。（決まらないのを叱るのは逆効果ですね）
・彼らの関心のある事柄に関しての本を迅速に手渡します（学校図書館の蔵書と学校司書の活躍が必要です）。
・それでも手がかりが見つからなければ、とりあえず百科事典や学習図鑑を渡して読んでもらいます。面白い題材を見つけたら、そこから引用をはじめるのが手軽です。

一方で、（決して先生がそうだというわけではないのですが）先生とその周囲がかえってハードルを高めている場合も多いです。

・小学生らしい、「オチャラケでない題材」がマイ探究にふさわしい、というハードル（テキストの「『おちゃらけ』分野をまじめに探究しよう」参照）。
・あらかじめ何か大枠を決めてしまい学習内容を先回りして狭めてしまうハードル。
・時として親御さんがハードルを無駄に高める場合があるので注意します。

考えてみると、課題設定（題材選択）はさっさとクリアすべき「ハードル」かというと実はそうでもありません。「自分で課題設定を行う」ためにいろいろ悩む道のりこそが彼らにとっては（場合によっては人生初の）重要で大切な局面です。なにしろマイ“プラン”学習ですから、結果よりは計画それ自体を大事にしてもいいかと思うのです。極端な話、たとえ時間いっぱい題材が決まらなくても、それはありがちなことですから「それはそれ」くらいに構えていたほうがよいです。ふりかえってみれば彼らも、自分で考え続けた時間をまったくの無駄とは考えないものです。

ゴールに向けて進めない子どもたちどう支援したら？

小学校教員です。総合的な学習の時間を例に挙げて話をすると、わたしは課題設定時にゴール設定をして、そこを目指すにはどのような課題解決が必要かというプロセスを踏んで、活動計画を作成し進めることにしています。そこでトライアンドエラーを繰り返す中で深めていくのですが、遅々として進まなことがよくあります。適切な支援が難しいと感じているのですが、何かアドバイスいただけることはありませんか？

※清教学園の探究学習では「課題設定時にゴール設定」はしません（できませんといってもいいです）。「課題（題材）設定から課題解決の道のりも含めてすべてゴール（目的）」なのです。ああ、わかりにくいですね。

まずは子どもさんが「この課題（題材）で進もう」という納得を得るためには、自分の興味に照らして結構な時間がかかるべきです。逆に課題設定（題材選択や特に問いの設定）を安易にさせな

い気遣いが必要だと思います。本を渡して「この世界がおもしろい」と気づいて進めるなら、あとはかなり自分でやっていけるからです。言い換えれば課題設定（この場合は題材選定）の深さに応じて学びの深さが決まり、課題解決（問いへのこたえ）は最後にやってくるものです。それくらい子どもにとって課題設定（題材選定）は大仕事ですから課題設定（問題選定）はさらに大仕事なのです。個人的には小中学生なら課題設定（題材選定）ができれば立派だと思います。

　このように題材選びに苦しんで、興味から題材選定をして、問いを設定したり解決したり…その道のりのすべてが大切で、その充実がゴール（目的）なのです。

探究の深さを子供自身に実感させるにはどうしたら

　探究の深さを子供自身に実感させるにはどうしたらいいか。色々試してはいるが、浅い調べ学習で精いっぱいの児童もいる。個に応じてとは思うが、問題に正対して探究を自ら進めていけるようにするには、まず何を目標にすればいいのか（もちろん発達段階や積み重ね、単元構成、問題設定、動機付け等々も大きく関係するとは思うが）お聞きしたい。

※たしかに「浅い調べ学習」は残念ですね。私なら、たとえ問いを設定して答えるのが難しくても、「深い調べ学習」ができれば御の字だと感じます。「まず何を目標にすればいいのか」といえば、興味をもった「分野」選びと「題材」選びです。子どもさんが納得して楽しめる興味の深さに応じて、後の調べの深さ・問題設定の深さが決まってくるからです。では、さらにさかのぼって分野・題材選びのためになにをすればいいか。図書館の本の手渡しです。ここで図書館・学校図書館・学校司書の実力が問われます。とはいえ、小中学生の興味はそれほど広く多様性のわるものではありませんから、なんでも学べる学校図書館はそれほどお金をかけずに作れるはずです。中学生の場合は添付資料をごらんください。